「本堂が一瞬で火の海」惨状の記憶、生々しく 岐阜空襲のつどい、体験者が語る

岐阜新聞 web2024.7.7

岐阜空襲の体験を語る春日規章さん（右）ら＝岐阜市橋本町、ハートフルスクエアーG
© 岐阜新聞

太平洋戦争末期に岐阜市中心部が焼け野原になった岐阜空襲の体験者らが語る「岐阜空襲のつどい」が 6 日、同市橋本町のハートフルスクエアーG で開かれ、空襲で被害を受けた寺院の関係者らが当時の惨状の記憶を生々しく語った。

岐阜空襲があった 7 月 9 日に合わせて、市平和資料室友の会が空襲の実相を解明し語り継いでいこうと毎年開いており、約 40 人が参加。尊照寺（同市則武西）前住職の春日規章さん（84）と円成寺（同市寺田）の住職堀無明さん（85）が空襲体験などを語った。

当時 5 歳だった春日さんは、尊照寺で祖父母らといたところ、空襲に遭った。近くの防空壕に逃げ込もうとした瞬間、「爆弾が落ちてきて本堂に直撃し、辺りが一瞬にして火の海になった」と焼夷（しょうい）弾の恐ろしさを振り返った。

近隣住民らが消火しようと試みたが、「手の施しようがなく、ただただ見ているしかなかった」と語り、本堂などは全焼したという。甚大な被害を受けた市中心部方面は「空が真っ赤っかで忘れられない」と戦禍の悲惨さを語った。

市内で空襲を経験した別の参加者らも当時の記憶や戦争への思いを語り、「乳母車で黒焦げになってしまった乳児の遺体や、火がなかなか消えないさまは今でも鮮明に覚えている」「戦争は本当に罪だと思う」などと話した。